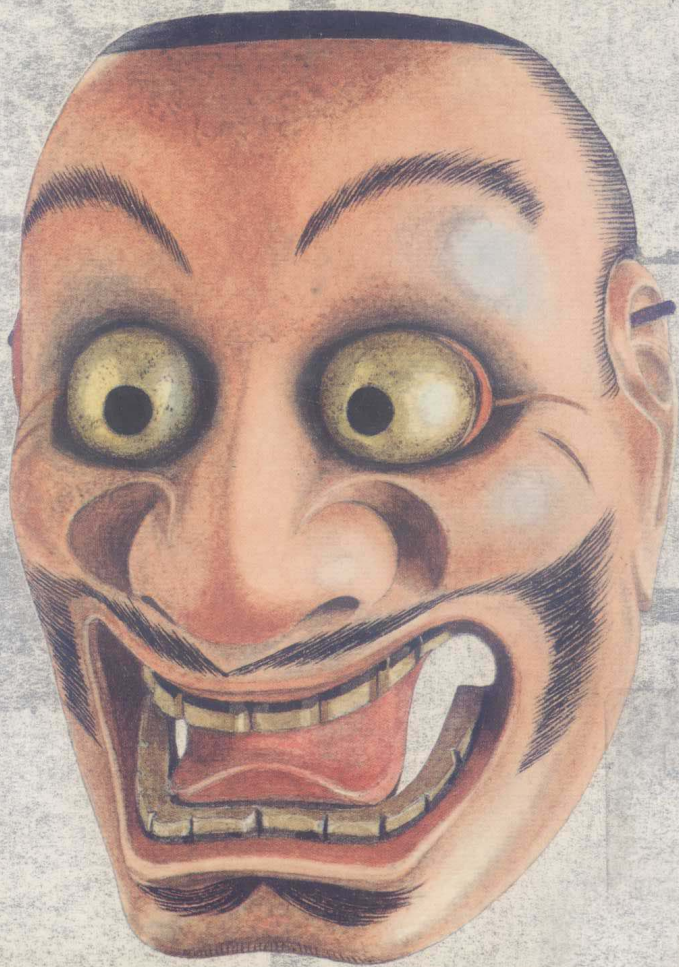


銀の館 下 永井路子





文春文庫

銀の館(下)

定価はカバーに
表示してあります

1983年12月25日 第1刷

1992年8月10日 第10刷

著者 永井路子

発行者 新井 信

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102

TEL 03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが、小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-720014-7

文 春 文 庫

銀 の 館
(下)

永井路子



銀の館(下) 目次

応仁の春	7
大乱	28
密事	70
変転の季節	118
光と影	157
岐れ路	208
公方失踪	264
秋の笛	302
弔鐘	349
解説 尾崎秀樹	408

銀
の
館
(下)

応仁の春

——よもやこんな大事になろうとは……。

富子は顔の血がひいてゆくを感じていた。

——万事うまくゆくと思っていたのに。

どこからこんなふうに事がもつれてしまったのか。

——そうだ、御所さまだ。

山名の館で義就よしかつの饗応きやうおうをうけたとき、義政は、なんではっきり、義就こそ畠山の家督の地位にある人間であり、万里小路まにこうじに入るべき人間であることを宣言してくれなかったのか。あの日、義政の弟、義視よしかみが、そばから歯がゆい思いをしたのとちょうど反対の立場から、富子は夫の優柔不断ようじゅうふたんとに、いま煮えくりかえるような思いを味わっているのであった。

——あの方は、いつもそうだ。大事なときに、事をあいまいにしよう。普通の人間ならそれでもすむが、あの方は將軍ではないか。はっきりした意志を表明されたいおかげで、どんなに周囲が迷惑をこうむることか。

今度だって、もっとはっきり義就支持を表明していれば、細川勝元だって、文句のつけようがなかったのである。

——何という無責任、男にあるまじき意気地のなさ……。

ここがわが子にとっても大事なときだ、ということ、あの方はちっともわかっていない。

——なのに私と来たら、こうして、まるで細川のとりこになったようにしていなければならぬなんて……。

妊娠、そして出産という女の生理が、これほど腹立たしく思えたことはなかった。富子がいらしているうちに世の中の情勢は、いよいよ陰悪になって来た。事は畠山政長と義就との家督争いに似て、その実、細川勝元と山名宗全という二人の実力者の対立であることが誰の目にもはっきりして来たのである。そうなったとき、事めんどろとばかり先手をうったのは、気の短い山名宗全である。堀飯の当日、そのまま御所に居つづけて、いよいよ守りを固くし、

——さあ、細川攻めてこい。

一戦を辞さない構えをみせたのだ。

宗全はしかし、武勇一点張りの男ではない。花の御所をひしひしととりかこむ一方、「御所さまからの至急のお召しでございます」

と今出川どの、義視の許に走らせた。義視が細川方にかつがれるのを恐れたからである。じじつ義視はこの数日の動きに居ても立ってもいられず、細川館にでも逃げこもうとしていたところだった。が、宗全の迎えは一足早く今出川の館へやって来た。

「兄上のお召し？」

そう聞いてしまうと断れないのが、この真面目男の弱味である。

仕方なく花の御所へやって来たが、とたんに監視がつけられ、軟禁同様の状態におかれた上、宗全からは、

「細川一門は五日のことを何か誤解しているようですな。御所さまはあれほどはつきり万里小路の館を義就のものと仰せられましたのにな。左様ではござりませぬか」

妙な念の押され方をした。あの日山名の館に顔を見せなかった細川勝元に、余計なことを告げ口したのは、お前ではないのか、と言わぬばかりの嫌味たっぷりの言葉に、義視はふるえあがった。

——花の御所で俺は孤立している。

恐怖が彼を襲った。

真面目なだけに気の小さい彼は兄の義政のようにぼんやりしてはいられないたちである。先の方まで考えて気に病む彼を宗全の蛇のような瞳は見逃さなかった。

——この際、政長と手を切れ。こう細川へ使を出していただきたい。

まるでそれがお前の義務だとも言おうような強圧的な態度で、彼は義視に迫った。

——兄上……。

蛇に睨まれた蛙のように、おどおどと義視は兄の顔色を窺う。が、兄はいつに変らぬおっとりとした態度で、やれともやるなとも言わない。

——兄上、私はどうしたらいいのですか。

悲鳴をあげたくなるのをやると義視はこらえた。あの日、このぐずな兄が無責任な決定をしたおかげで、とんだ役目を背負わされてしまった。が、兄は、この期に及んでも何の責任も感じていないらしい。

「兄上っ」

今度こそ責任を持ってもらわねば、とつめよると、やっとおもむろに彼は口を開いた。

「戦いはとにかく困る」

その通りだ。為政者として、これほどごりっぱな発言はない。問題は具体的にどうするかである。義政はそこまで来ると、

「さあ……」

頼りなげな微笑をうかべるばかりなのだ。義就に万里小路の館へ入れと言った五日の決定を取消すべきか？ いや、それでは將軍の權威が丸つぶれだ。第一、山名宗全にとりかこまれて、手も足も出ない状態にいるいま、そんなことはできない。では、改めて政長に出てゆけというべきか。しかし、そう言いきってしまうには、背後の細川の武力が無気味である。

そして義政は今度も、まことに歯ぎれの悪いやり方で、宗全の言い分を受入れた。彼はやっと義視に言う。

「細川に言つてやれ。とにかく戦いを大きくすることはよくない、とな」

そして、筋を通す意味で、山名へも申入れをする。

「細川が手をひくから、そなたたちも実力行動には出ないように」

彼としてはむしろ大変な妙手のつもりであった。こうすれば、細川の顔も立つし山名の顔も立つ。しかも両者が激突するという最悪の事態は避けられる。だから「戦いはよくない」という彼自身の大義名分もまかり通ることができる。が、義視の胸のうちは複雑だった。

——やっぱり、俺がそれを言つてやらねばならないのか……。

宗全におどされ、その上義政の意向がそうだとあつてはやむを得ない。これは俺の責任ではないぞ、というほつとしたような、しかし勝元への後めたさの残る重たい心を抱いて、彼は細川方の使者をよびつける。そしてこの時、その役を負わされたのが、細川教春だったのである。

富子は、花の御所と細川方のそんなやりとりの圏外にあった。彼女が事のなりゆきを知ったのは、十六日の夜遅くなって、細川教春が産所に顔を見せたときである。

「万事相すみました」

言葉少なく彼は言った。見ればひどく疲れた、重苦しい表情をしている。

「どのように」

「御所さまの御意向で、我々はこの件からすべて手をひく事になったのでございます」

一語一語を齒の間から無理やり押出すように言った。

「それは、それは——」

富子にはそれしか言いようがない。

「今出川どのを通じて、戦いはやめよ、ということでございますので——」

教春は苦い笑いを片頬に浮かべて、

「ま、御所さまの御意向とあればやむを得まいということ……」

繰返してそう言った。どうやら総帥そうすい勝元を説得するにはかなり手間どったようだし、必ずしも

彼自身、釈然としてはいないらしい。

「ここで山名の無体な言い分を認めてしまうことは私としても納得がゆきませぬが、御所様の御意向とあらば」

聞きようによつては、妙にからんだ言い方であった。それはそうだろう。勝元としては、今度という今度はかなりの決意を固めて戦鬨準備をととのえていたのだから。冷静な打算をいつも忘れない勝元は、義政も義視も山名側に押えられては形勢不利と見て戦いを断念したのだろうが、それだけに無念さは大きかったに違いない。

では山名方は？ その分だけ勝利に酔っていたのだろうか。いや、おかしなことに宗全も義政のこの妥協案に必ずしも満足してはいなかったのである。

形からみれば、たしかに宗全側の勝利である。が、このとき、一にも押し、二にも押しの宗全は、さらにもう一押しして、是が非でも畠山義就を万里小路の館へ入れてしまつつもりだった。

が、義政の決定は今度もあいまいだったし、その上、細川勝元が政長の後押しをやめた以上、宗全も一応義就の側を離れねばならない。

明らかに彼は不満だった。結局義政の考えだした妥協策——両雄の顔を立てる苦肉の策は、二人を満足させるどころか、両者から恨まれるという結果を招いてしまったのだ。

事の本質を直視するよりも、関係者の顔を立てることに躍起となる政治のあり方——それを政治の高等技術だと思ひこむのは現代も同じことだが、それが根本的解決をもたらさなかったということもまた同様だった。義政はそれには気がつかない。細川と山名に手をひかせたから、戦争の拡大は食いとめたと思つている。彼の「戦いはよくない」という、ごりっぱな大義名分が、天下に輝いたことに満足さえしていた。そして、後は畠山の二人にまかせればよい、と簡単に考える。

「どっちが万里小路の館のあるじになるかは、畠山内部の問題なのだから……」

その考え方の裏には、これ以上かわりあいにはなりたくないという政治的な怠惰がある。

そしてその怠惰の中で彼は大きなものを忘れていた。

そもそも五日に山名の館で、彼は義就こそは嫡流だ^{ちやくりゅう}とみとめたはずではないか。なのに十数日後のいま、みずからその決定をくつがえし、二人が戦つてこれを決めたらいいだろう、と言っている。義政は自分の手で決定を変更してしまった。將軍の權威は自らの手によって否定された

のである。

あるいは彼は言うかもしれない。

「あの場合それはそれよりほかに道はなかったのだ。あれでせいっぱいだった」

と。いつの世にも責任を回避したがる人間はぬけぬけとそう言う。しかしそれは政治的怠惰への弁解にすぎない。彼はこれによって全面戦争から局地戦争へと危機を縮小させたつもりかもしれない、が、これもいつの時代にもいえることだが、戦いというものは、そんなふうに器用に封じこめるしろものではないのである。

このとき、山名と細川の戦いをやめさせたことよりも、両畠山の戦いを認めてしまったことによって、どんな事態がひき起されるか、歴史はやがてこの政治的に無能な王者を裁くはずであるところ、このとき、この決定により危機感を感じたのは、畠山政長の方であった。誰からの援助もなしに、音に聞いた勇将、義就と戦うことには全く自信がなかった。ほとんど防備らしい防備を持たない万里小路館をどうしたら守りぬけるか？

いま義就側は波に乗っている。しかも音に聞いた戦さ上手、その彼がひた押しにやって来れば、万里小路の館はひとたまりもない。

——この都の真中であいつに負ければ、天下に恥をさらすことになる。

それよりは、という判断が、政長側に働いたのであろう。義就が攻めよせて来るより一瞬早く、十八日松曉、政長はみずからの手で館に火をかけた。折も折、霰まじりの雪が降ってはやみ、火に誘われたように風が吹き出した。雪は風に巻かれて、火の粉とともに宙に舞い、地上の炎に照らされると、あるいは紅く、あるいは黒く見えるのだった。

「あつ、火の粉が降る。黒い雪が降る」

騒ぎに叩き起された京の町びとたちが、その異様な光景に、禍々しさを感^{まが}じて震えあがったのは、庶民の感覚のたしかさをしめすものであったかもしれない。まさしく、戦火は、この暁方、都へ及んだのだ。地方の各地で果^はしもなく繰りひろげられていた同族間の家督争い、あるいは諸豪族の血みどろのつぶしあい、遂に都を舞台にして行われるにいたったのである。

赤い雪はやがてやむだろう。

が、戦いの火は消えはしないだろう……。

なのに、花の御所の義政は、まだその事に気づいていない。政長が館を立ちのいた、という知らせを聞いて、彼はむしろほっとしていた。

「そうか、火をかけたか」

火事はやがてやむだろう。ともかく、あそこで戦いをしなかっただけでもめつけものだ。のんきにそう考えていた彼の耳に、続いて第二報が入った。

「政長は、上御霊社^{かみごりもち}の森に陣取りました」

「なに、御霊社に？」

義政は眉をしかめた。

——まだやるつもりだったのかあいつは……。はて迷惑な。

彼らに都で戦われるというのは、自分の家の庭先でやくざが取っ組みあいのけんかをはじめたようなものだ。少なくとも、義政にはそういう意識しかなかった。ふいに見ずしらずのやくざに庭に飛びこまれた人間が急いで戸を閉め、これ以上助っ人が来て騒ぎが大きくならぬよう、どちらが負けても勝ってもいいから、早くけりがつくように息をひそめているのと、彼の心境は同じ

であつた。

庶民ならそれよりほかはないだろうが、義政はともかく、天下の將軍である。我関せずといった態度は政治の首班にあるものとするべき態度ではない。

現代の庶民なら多分、ここで警察を呼ぶだろう。ところが義政は警察そのものでもあるのだ。それがただ迷惑顔をしているというのは、無策、無責任というよりほかはないのだが、そのときの彼は、勝元と宗全の手出しを止めただけで、あとは投げだしてしまっている。

一方、義就は、政長が万里小路の館を焼いたと知って、その嫌がらせに激怒した。

———そうか、俺に渡すくらいなら焼いた方がまし、というのだな。よしそれなら……。

上御霊社にひしひしと攻めよせてゆく。その背後には、宗全の大軍が無言で控えていた。

どうにも一戦は避けられそうもなくなつて来た。特に細川館は政長の陣どつた上御霊社からは程近い。政長勢の慌しい動きが手にとるやうにわかるだけに、異様な興奮につつまれている。

「いよいよ、義就方が攻めて来るらしいぞ」

「政長どのの手勢は？」

「大分少なくなつたという話だ。万里小路の館を焼いたとき、見切りをつけて抜け落ちてしまつた者も多いというから」

「頼りにならない奴らだなあ」

主人が政長方だという意識があるから、侍たちも、どうしても政長びいきの立場でものを眺めてしまふ。

その議論の渦の中に、蘭之介もまじっている。

夜明けまで一睡もしなかつた侍たちの中で、篝火かがりびに頬をほてらせた大男が、だみ声をはりあげ